特集！太平洋ゴミベルト問題

1年間に11トン!!

ミッドウェイ環礁に漂着した大量の漁具・漁網類

北太平洋のど真ん中にあるミッドウェイ環礁は、希少野生生物の生息地および保護区として注目を集めている。ところがその美しい島は太平洋ゴミベルト（右ページ写真）のまっただ中にあり、日本やアジア諸国から漂着する大量のゴミにより、野生生物は深刻な被害を受けているというのだ。

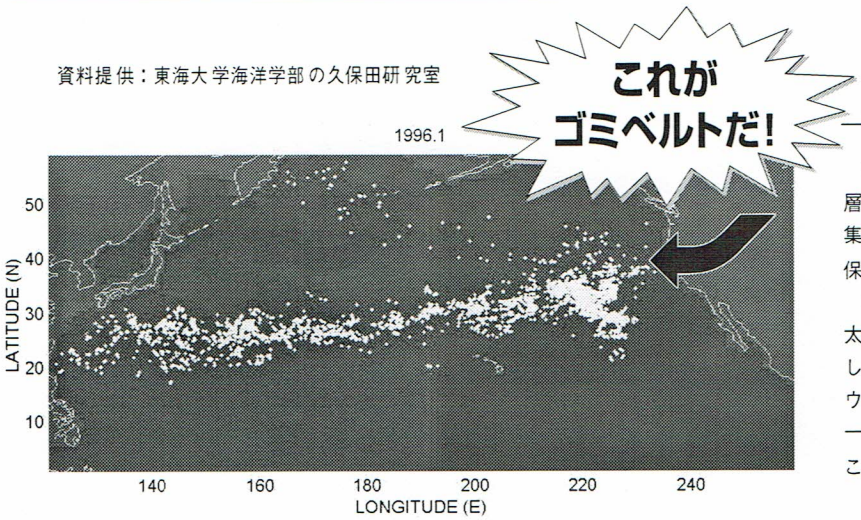
港に積み上げられた11トンにも及ぶ様々な漁網

希少種の生物にも危機！

皮肉にも自然保護区として注目を集めるこのミッドウェイ環礁や北西ハワイ諸島には、海流の関係で太平洋沿岸のアジア諸国から大量のゴミが漂着する。環礁にすむ多くの野生生物にとって、とりわけ深刻な被害をもたらす危険なゴミは漁網やロープ類である。漂着した漁網や化学繊維でできたロープは、環礁のリーフエッジに絡みつき、分解されることなく水中を漂い続ける。それらは、ハワイアンモンクアザラシやウミガメ等を溺死させる危険が高いため、発見次第に回収して破棄することになっている。OWSでも、現在ミッドウェイフィールドオフィスに所属する2名のネイチャーガイドがボランティアとしてFWSの自然保護官に協力し漁網類の引き上げ作業を行っている。昨年1年間に回収し引き上げられた漁具・漁網関係ゴミ（写真上・右）は11トンに及んだ。

流れ着いた大量の「ブイ」

資料提供：東海大学海洋学部の久保田研究室



巨大な「ゴミ集積ベルト」

北太平洋に棄てられたゴミは、わずか数ヶ月で表層の海流により中緯度海域に集まり、巨大な「ゴミ集積ベルト」を出現させる。(東海大学海洋学部の久保田雅久教授らのグループ調べ)

北緯20度から40度の中緯度帯に寄せ集められ、北太平洋をほぼ横断する幅千キロ前後の帯。特に集中したのはハワイ北東海域とのことであるが、ミッドウェイ環礁や北西ハワイ諸島もベルトの中にある。一刻も早い沿岸諸国の抜本的ゴミ対策が待たれるところである。

雛の死骸から大量のプラスチックゴミが!!

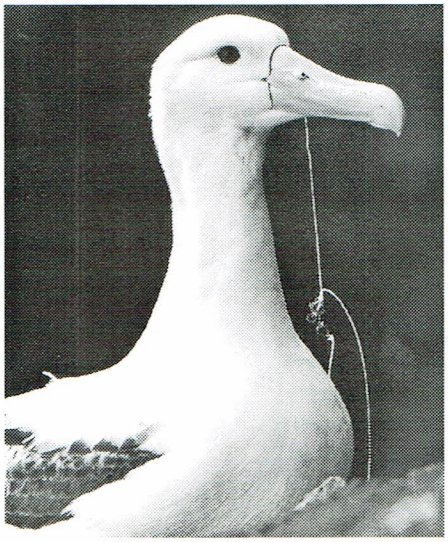
漁網類についで危険なゴミは、プラスチック製品やゴム製品。これはコアホウドリの雛に深刻な打撃を与え、危機をももたらす。

ミッドウェイで繁殖するコアホウドリは、2月初旬からから6月末頃までの子育ての時期、食欲旺盛な雛を育てるため、大量のエサを探して洋上を飛翔する。主なエサはイカやトビウオだが、海面を漂う自然分解しないプラスチック製品やそのかけらをエサと間違って補食してしまうことがある。雛は、その親鳥から口移しでエサを与えられるわけだから、当然それらプラスチック製品も全て一緒に飲み込むことになる。しかし雛は、その消化できないゴミにより、疑似満腹感を得てしまうため、餌を受けつけなくなる。結果、栄養失調で死にいたることが多い。

7月末の繁殖期の終わりには、島のあちこちに死んだ雛の屍が累々と見られる。その胃袋からは、例外なくプラスチックなどのゴミが見つかり、中には両手の平にいっぱいの量のゴミが見つかる場合も多い。

▲コアホウドリの雛の死骸。胃の中にはビニールやプラスチック製品など消化できないゴミがいっぱい

伊豆諸島からはアホウドリ保護活動の成果



親鳥のくちばしにぶら下がったテグスが見える。釣り針が食道に引っかかっていると思われる。

しかし、くちばしにはテグスが！

伊豆諸島からは、24年間もの地道な保護活動が実り、伊豆諸島鳥島を繁殖地とするアホウドリが、昨年5月推定で1,070羽を突破した、というグッドニュースが飛び込んできた。長谷川博・東邦大学助教授らによる活動の成果で、絶滅の危機を脱し、とりあえず「安全圏」の入り口にたどり着いた状態だという。

ただ今後も注意深く観察を継続する必要があるとのこと。ゴミ問題はこちらも同じで、雛が吐き戻すエサの中のプラスチックゴミが年々増加傾向にあるようだ。また、釣り針がついたままのテグスが絡まって固まりとなったものもたびたび発見されており、混獲や磯釣りのマナーなどにも注視していく必要がある。長谷川博・東邦大学助教授によって撮影されたこの写真(写真左)は、実に痛々しい。

▲東邦大学研究室にて
長谷川博・東邦大学助教授

1976年から伊豆諸島の鳥島においてアホウドリの献身的な保護活動を行っている。1999年3月には全米野生生物連盟「'98保護功労賞（国際部門）」を受賞。OWSの発起人であり特別会員だ。